

プーチン・ドクトリンとは何か

ウクライナへの進出は常に計画の一部であった

アンジェラ・ステント
フォーリン・アフェアーズ
2022年1月27日

現在、ロシアとウクライナの間で起きている危機は、30年前からの試練である。それは、ウクライナとその NATO 加盟の可能性だけではない。ソ連崩壊後に作られた欧州秩序の将来に関わるものだ。

1990年代、米国とその同盟国は、ロシアが明確なコミットメントや利害関係を持たない欧州・大西洋の安全保障体制を構築したが、ロシアのプーチン大統領が就任して以来、ロシアはこの体制に挑戦している。

プーチンは、世界秩序がロシアの安全保障上の懸念を無視していると日常的に訴えており、ポスト・ソビエトの空間でもモスクワが特権的利益領域を持つ権利を認めるよう欧米に要求している。また、ロシアの軌道から外れたグルジアなどの周辺国に侵攻し、軌道修正を妨げようとしている。

プーチンは、このアプローチをさらに一歩進めた。ウクライナへの侵攻は、2014年にロシアが行ったクリミア併合やドンバスへの介入よりもはるかに包括的なものになると脅している。この侵攻によって、現在の秩序が損なわれ、ヨーロッパ大陸や世界情勢におけるロシアの「正当な」場所での優位性が再び確立される可能性がある。

彼は、今が行動を起こす良い機会だと考えている。彼は、米国は弱体化し、分裂し、首尾一貫した外交政策をとることができなくなっていると考えている。数十年に及ぶ在任期間を経て、彼は米国の持続力に皮肉を言うようになった。プーチンは今、5人目のアメリカ大統領を相手にしており、ワシントンを頼りにならない対話の相手と見なすようになっている。ドイツの新政権はいまだに政治的基盤を確立しておらず、欧州は全体的に国内の課題に集中している。

エネルギー市場はひっ迫し、ロシアに大陸に対する影響力を強めている。
2014年に西側諸国がロシアを孤立させようとしたときに中国がロシアを支援した。その時と同じようにクレムリンは、北京の支援を受けられると考えている。

プーチンは侵攻しないと決めるかもしれない。しかし、侵略するかしないかにかかわらず、ロシア大統領の行動は、モスクワが今後数年間で破壊的な行動をとることを示唆する一連の外交政策の原則に基づいている。

それは "**プーチン・ドクトリン** "と呼ばれる。このドクトリンの核心は、西側諸国がロシアを、あたかもソ連のように、尊敬すべき大国であり、恐れるべき大国であり、近隣諸国に特別な権利を持ち、あらゆる重大な国際問題について発言権を持つように扱うように仕向けることにある。

このドクトリンは、完全な主権とともにこのような権限を持つべきなのは一部の国家だけであり、他の国家はその意向に従わなければならないとする。それは、現在の権威主義政権を擁護し、民主主義国家を弱体化させることを意味する。

そして、これらのドクトリンは、プーチンの最大の目的である、ソ連崩壊の結果を覆し、大西洋同盟を分裂させ、冷戦を終わらせた地理的な解決策を再交渉することに結びついている。

過去の栄光

プーチンによれば、ロシアは国際的に重要な決定を下す際にテーブルにつく絶対的な権利を持っているという。欧米は、ロシアが世界の取締役会の一員であることを認識すべきである。プーチンは、1990年代には弱体化したロシアが米欧同盟国に従うことを余儀なくされ屈辱を味わったが、その後は、(取締役会の一員であるとの) 目標をほぼ達成した。クリミア併合後、モスクワはG8から排除されたが、国連安全保障理事会での拒否権や、エネルギー、核、地理的な超大国としての役割は、世界の他の国々がロシアの意見を考慮しなければならないことを確実にしている。

ロシアは、2008年のグルジアとの戦争後、軍の再建に成功し、現在では世界

的にパワーを投射する能力を備えた地域屈指の軍事大国となっている。この数週間で明らかになったように、モスクワが近隣諸国を脅かす能力を持つことで、西側諸国を交渉のテーブルに着かせることができるのである。

プーチンにとっては、ロシアが自国の安全が脅かされていると考えるときに武力を使うのは完全に適切である。ロシアの利益は西側諸国の利益と同様に正当なものであり、プーチンは米国と欧州がそれらを無視していると主張している。しかし、米欧はクレムリンが主張する不満の物語をほとんど否定している。

プーチンがソ連崩壊を「20世紀の偉大な地政学的大惨事」と表現したのは、2500万人のロシア人がロシアの外に出てしまったことを嘆いていたからであり、特に1200万人のロシア人が新しいウクライナの国に入ってしまったことを批判したのである。

昨年夏に出版された5,000語の論文「ロシア人とウクライナ人の歴史的統一性について」に書かれているように、1991年には「人々は一夜にして外国にいることに気づき、今度は確かに歴史的な祖国から連れ去られた」のである。彼のエッセイは最近、ロシア軍に配布された。

このような西側諸国への敗北の物語は、プーチンの特別な強迫観念と結びついている。それは、NATOが単にポスト・ソビエト諸国を認めたり援助したりすることに満足せず、ロシア自身を脅かすかもしれないという考えである。

クレムリンは、この強迫観念が現実の懸念に基づいていると主張している。ロシアは何度も西欧から侵略されてきた。20世紀には、1917年から1922年までの内戦で、米国を含む反ボリシェヴィキ連合軍に侵略された。第二次世界大戦では、ドイツが2度にわたって侵攻し、2600万人のソ連国民が犠牲になった。

プーチン大統領はこの歴史を、現在ロシアが懸念しているNATOのインフラがロシアの国境に近づいていることや、その結果としてモスクワが安全保障を要求していることと明確に結びつけている。

しかし、現在のロシアは核超大国であり、新型の極超音速ミサイルを持っている

る。小さくて弱い隣国はロシアに侵攻する意図はもっていない。実際、ロシアの西に位置する隣国は別の物語を持っており、何世紀にもわたってロシアからの侵略に対して脆弱であることを強調している。

プーチンは米国を「我々のパイを切り取ろうとしている」と非難しているが、米国もまた、決して攻撃することはないだろう。とはいえ、ロシアの脆弱性を示す歴史的な自己認識は、同国の人々の心に響いている。

政府がコントロールするメディアには、ウクライナが NATO の侵略のための発射台になりうるという主張があふれている。実際、プーチンは昨年のエッセイで、ウクライナが "ロシアに対する踏み台 "にされていると書いている。

また、プーチンは、ロシアがポスト・ソビエト空間における特権的利益の領域を持つ絶対的な権利を持っていると考えている。つまり、旧ソ連の近隣諸国は、モスクワに敵対するとみなされる同盟、特に NATO や EU に参加してはならないということである。

プーチンは、12月17日にクレムリンが提案した2つの条約の中で、この要求を明確にしている。この条約は、ウクライナをはじめとするポスト・ソビエト諸国、およびスウェーデンとフィンランドに対して、永久的な中立性を約束し、NATO への加盟を求めないことを要求している。また、NATO は1997年の第1次拡大前の軍事態勢に戻り、中欧・東欧に駐留するすべての兵員と装備を撤収しなければならない。(これにより、NATO の軍事的プレゼンスは、ソビエト連邦が崩壊したときの状態にまで低下する)。また、ロシアは NATO 以外の近隣諸国の外交政策の選択に対して拒否権を持つことになる。

これにより、ウクライナをはじめロシアに隣接する国々では、親ロシア派の政権が確実に誕生することになる。

分裂と征服

今のところ、このような異常な要求を受け入れる用意のある西側政府はない。欧米では、国家の国内体制や外交政策の決定は自由であるという前提が広く浸透している。

1945年から1989年まで、ソ連は中欧・東欧の自決を認めず、ワルシャワ条約加盟国の内政・外交を、現地の共産党や秘密警察、赤軍などを通じて統制し

ていた。1956年にハンガリー、1968年にチェコスロバキアがソ連モデルから大きく逸脱すると、その国の指導者は武力で追放された。ワルシャワ条約は、加盟国のみを侵略するというユニークな実績を持つ同盟であった。

現代のクレムリンの主権解釈は、ソビエト連邦のそれと顕著な類似性がある。ジョージ・オーウェルの言葉を借りれば、ある国家は他の国家よりも主権を持っているということである。

プーチンは、ロシア、中国、インド、米国という少数の大国だけが絶対的な主権を持ち、どの同盟に参加するか拒否するかを自由に選択できると述べている。ウクライナやグルジアのような小国は完全な主権を持っておらず、ロシアの主張を尊重しなければならない。プーチンによれば、中米や南米が北の大国に配慮しなければならないのと同様である。

また、ロシアは西洋的な意味での同盟国を求めるのではなく、中国のようにロシアの行動の自由を制限したり、ロシアの内政に判断を下したりしない国との互恵的なパートナーシップを求めている。

このような権威主義的なパートナーシップは、プーチン・ドクトリンの要素である。プーチン大統領は、ロシアを現状維持の支持者、保守的な価値観の提唱者、既存の指導者（特に独裁者）を尊重する国際的なプレーヤーとして紹介している。

最近のベラルーシやカザフスタンでの出来事が示すように、ロシアは弱体化した権威主義の支配者を支援する常連国である。近隣諸国だけでなく、キューバ、リビア、シリア、ベネズエラなど、遠く離れた地域でも独裁者を擁護してきた。クレムリンによれば、欧米は、2003年のイラク戦争や2011年の「アラブの春」のように、混沌とした政権交代を支援しているという。

しかし、ロシアは自らの「特権的利益領域」において、クリミア併合やグルジア、ウクライナへの侵攻が示したように、自国の利益が脅かされると考えたとき、あるいは自国の利益を増進させたいと考えたときに、修正主義的な行動をとることができる。強権的な政権指導者・後援者として認められようとするロシアの動きは、ウクライナでの事例のように、クレムリンが支援する傭兵グループが世界各地でロシアに代わって行動することで、近年ますます成功してい

る。

また、モスクワの修正主義的な干渉は、自分の特権的な領域と考えているものに限らない。プーチンは、分裂した大西洋同盟がロシアの利益に最も貢献すると考えている。そのため、ヨーロッパの反米派やユーロ懐疑派を支援したり、大西洋の両側で左右のポピュリスト運動を支援したり、選挙妨害を行ったり、全般的に欧米社会の不和を悪化させるような活動を行っている。

彼の大きな目標の一つは、米国が欧州から撤退することだ。ドナルド・トランプ米国大統領は、NATO 同盟を軽蔑し、米国の主要な欧州の同盟国（特に当時のドイツのアンゲラ・メルケル首相）を見下しており、米国の NATO からの撤退を公然と口にしていた。

ジョー・バイデン米大統領の政権下では、同盟関係の修復が懸命に進められており、実際、ウクライナをめぐるプーチンによる危機が同盟の結束を強めている。しかし、ヨーロッパでは、2024 年以降も米国のコミットメントが続くかどうかについて疑念が持たれており、ロシアはソーシャルメディアを中心に懐疑的な見方を強めることに成功している。

大西洋同盟の弱体化は、プーチンの究極の目的である、冷戦後に欧州、日本、米国が推進してきたリベラルでルールに基づく国際秩序を捨てて、ロシアに従順な国際秩序を構築する道を開くことになる。

モスクワにとって、この新しいシステムは、19 世紀の列強の協調に似ているかもしれない。また、ロシア、米国、そして現在の中国が世界を三極の勢力圏に分割するヤルタ体制の新たな姿になる可能性もある。

モスクワが北京との和解を深めていることは、確かにロシアの「ポスト西欧秩序」の要求を強めている。ロシアも中国も、多極化した世界でより大きな影響力を行使する新しいシステムを求めている。

19 世紀と 20 世紀のシステムは、どちらも一定のルールを認めていた。冷戦時代には、アメリカとソ連は互いの勢力範囲をほぼ尊重していた。1958 年のニキータ・フルシチョフ首相のベルリン最後通告、1962 年のキューバ・ミサイル危機など、冷戦時代の最も危険な 2 つの危機は、軍事衝突に至る前に収束した。

しかし、現在の状況を見る限り、プーチンが提唱するポスト西欧の「秩序」は、ゲームのルールがほとんどない無秩序なホップズ的世界のようだ。プーチン流の新しいシステムを追求するやり方は、西側諸国のバランスを崩し、彼の真の意図を推測させ、彼が行動を起こしたときに西側諸国を驚かせるというものである。

ロシアのリセット

プーチンの最終的な目標と、今こそ欧米に最後通告に応じさせる時だという彼の信念を考えると、ロシアはウクライナへの再度の軍事侵攻を押さえることができるのだろうか。

プーチンが最終的にどう判断するかは誰にもわからない。しかし、ロシアの正当な利益を欧米が30年間も無視してきたという確信が、彼の行動を後押ししている。プーチンは、近隣諸国や旧ワルシャワ条約加盟国の主権的選択を制限するロシアの権利を再び主張し、外交であれ軍事力であれ、欧米にその制限を受け入れさせようとしている。

だからといって、欧米が無力だというわけではない。米国は、ロシアとの外交を継続し、同盟国やパートナーの主権を損なうことなく、双方が受け入れ可能な和解案を模索すべきである。同時に、ヨーロッパ諸国と連携してロシアに対応し、コストを課すことも継続すべきだ。

しかし、欧州が戦争を回避したとしても、2021年3月にロシアが軍隊を集結させ始める**前の状況には戻れない**ことは明らかだ。この危機の最終的な結果は、1940年代後半以降、欧州大西洋の安全保障における3度目の再編となる可能性がある。

第1回目は、第2次世界大戦後、ヨーロッパでヤルタ体制が2つの対立するブロックに統合されたことに伴って行われた。2回目は、1989年から1991年にかけて、共産圏、そしてソ連が崩壊し、その後、西側諸国が「完全に自由なヨーロッパ」の実現を目指したことに端を発する。プーチンは、ウクライナへの攻撃で、この秩序に真っ向から挑戦している。

米国とその同盟国は、ロシアの次の動きを待ちながら、外交と強力な制裁の脅

威によって侵略を抑止しようとしているが、プーチンの動機とそれが何を意味するのかを理解する必要がある。

今回の危機は、結局のところ、ロシアが冷戦後の地図を塗り替え、自国の安全を保証するという主張に基づいて、ヨーロッパの半分に対する影響力を再び強めようとしていることにある。今回は軍事衝突を避けることができるかもしれない。しかし、プーチンが権力を維持する限り、彼のドクトリンも維持されるだろう。

(了)

筆者は米ブルッキングス研究所のロシア問題専門家